

Title	イスラーム学事始めの頃の井筒俊彦
Sub Title	Toshihiko Izutsu in his formative years of Islamic studies
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	2010
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.79, No.4 (2010. 12) ,p.82(422)- 98(438)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20101200-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラーム学事始めの頃の井筒俊彦

坂本 勉

ただいまご紹介にあずかりました坂本です。今日は「イスラーム学事始めの頃の井筒俊彦」というテーマで話しをさせていただきます。最初になぜ、こうした企画を立てたのか、その趣旨について述べさせていただきます。

二〇〇一年九月一日にニューヨークとワシントンで同時多発テロ事件が起きました。これをきっかけにして、日本のみならず世界の多くの人がとは、イスラームがいかに自分たちの日々の暮らしに密接に関係しているか、その重要性について思い知らされ、イスラームとその世界に対して深い関心をもつようになりました。

私たちのように昔からイスラームの研究をしている者も、これまでの自分の研究を振り返り、イスラーム世界に対してどのような認識・理解をもってイスラーム世界と接してきたのかを反省し、これから先、この世界に住

む人たちとどのように向きあっていくべきか、真剣に考える人たちが増えてきました。

近年、イスラーム研究者たちの中で自分たちおよびそれより前の世代の人たちが、イスラームおよびその世界をどのように認識してきたのか、その研究姿勢を客観的に見直していこうとする動きが盛んです。こうした問題意識と観点から書かれた先駆的な研究の一つとして、今日、私の後にお話ししたことになる杉田英明先生の『日本人の中東発見』（東京大学出版会、一九九五年）を挙げておきたいと思います。この本は、出版された年から言いますと、九月一日の同時多発テロ事件を直接のきっかけとして著されものではありません。むしろ、これより一〇年ほど前の一九九〇年代初頭に起きた湾岸戦争、あるいは第二次世界大戦が終わってから今に至るまで続いているパレスチナ問題等に刺激されて書

かれたものですが、日本とイスラーム世界との間の関係を幕末、明治の時代にまで溯って俯瞰したきわめて優れた著作で、これから先、常に参照していかなければいけないものだと思います。

この杉田先生の本の他にも日本人のイスラーム認識を扱った著作、論文はいくつかありますが、これに対してイスラーム世界を理解していくために認識の問題と並ぶ重要な両輪のひとつを成す政策的な見地から、日本がイスラーム世界に対してどのように対処してきたのかということを考えていこうとする研究、著作は、残念ながらあまり多くありません。戦前期における日本とイスラーム世界との間の交流・関係は、戦争との関係で生じた面が強く、それに対する後ろめたさがどこかに潜んでいてそれを避けて通る傾向が強くあり、これまでこうした政策的な観点から日本とイスラーム世界との関係に光をあてるということはありませんでした。しかし、最近になってようやく、功罪は別として客観的に日本が中国大陸へ進出していくあたってイスラーム世界とどのような関係をつくっていったのか、それを見ていこうとする研究も出はじめてきました。私が編者になりました昨年三月に出版しました『日中戦争とイスラーム』

ム』（慶應義塾大学出版会、二〇〇八年）は、そうした関心からなされた仕事のひとつということができます。

本日のシンポジウムのテーマは、このような日本人のイスラーム世界に対する理解、認識、あるいは政策の問題を歴史的に考えていくにあたって忘れることのできない二人の先覚者、すなわち井筒俊彦先生と前嶋信次先生を取り上げ、お二人の先生を日本におけるイスラーム研究の源流のなかで位置づけていこうとするものです。

一、日中戦争期のイスラーム・ブーム

日本とイスラーム世界との関係、イスラームに対する関心の高まりについて考えていくとき、日中戦争の時代はきわめて重要な時期です。すでに明治の時代、とくに日露戦争の頃からイスラーム世界の重要性について日本は気がつくようになってきますが、本格的に踏み込んでイスラーム世界との関係を強化していくのは、日本が日中戦争に本格的に突入していく頃のことです。戦争が始まりますと、中国大陸に進出した日本軍は、そこに多くのイスラーム教徒がいることに気がつかれます。たとえば、華北には中国語を喋り、一見したところ中国人とほとんど変わりはないけれども、宗教的にはイスラーム

を信仰する回民と呼ばれる人たちがおりました。また、今の新疆ウイグル自治区には中国人はとまったく民族系統を異にするトルコ系のムスリムが多く住んでいました。そしてさらに西に行けば、ソ連邦領内にはウイグル人と同系統の言語、文化をもつキルギス人、カザフ人、ウズベク人等のトルコ系の人たちが住んでいました。こうした人々たちをどのように日本の側に取りこんでいくかということは、戦争を実際に遂行する軍部の人たちにとって急を要する問題であり、このような戦略的要請からムスリムおよびイスラーム世界に対する関心が急速に日本のみならず高まってくるようになります。

一九三七（昭和一二）年の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まっていきますが、翌年の一九三八年からイスラーム世界に対する政策を協議する機関、調査・研究をする組織が相次いでつくられていきます。たとえば、外務省が陸軍、海軍といっしょに立ち上げた「回教及猶太問題委員会」はその代表といえます。それまで中国および満洲、内モンゴルなどの周辺地域に住むムスリムにたいする政策、工作活動は、陸軍の特務機関などが中心になって行ってきました。しかし、日中戦争が始まると、日本のイスラーム政策は、従来の陸軍だけにとどまらず、

海軍、外務省も巻き込むかたちで進められていくことになりました。このように相互に連絡を取り、擦り合わせながら有効なイスラーム政策を立てていくという趣旨で設立されたのが、外務省内に事務局が置かれた「回教及猶太問題委員会」という組織でした。これがどの程度機能したのか、本当に有効なイスラーム政策が打ち出されたのかどうか、疑わしいところもありますが、いずれにしても、こういう組織が形だけでも立ち上げられたところに、日中戦争期における日本のイスラーム世界に対する関心の高まりをみることができます。

これと並行して同じ年に「大日本回教協会」という組織もつくられました。その会長を務めたのが、満洲事変の際に朝鮮軍司令官を務め、のちに陸軍大臣、総理大臣にも就任する林銑十郎という人です。この人は早くから満蒙問題に関心を持っていましたが、それをただたんに中国、東アジアの問題に限定してとらえるのではなく、将来的には日本と戦うことになるかもしれないソ連に対する政策という観点からイスラームの問題に関心をもち、取り組もうとしました。満洲から内モンゴル、寧夏、甘肅、青海、新疆の各省を経てソ連邦領内の中央アジアに向かつて延びる地域に住むトルコ系のムスリムを日本の

側に惹きつけ、その带状の地域を「防共回廊」にしていこうというのが、林に代表される陸軍の軍人たちの構想するイスラーム観でした。これに賛同する政治家、経済人などを糾合し、官民を挙げてつくられたのが「大日本回教協会」という組織だったのです。

また、「満鉄東亜経済調査局」という組織も一九三八年につくられました。これは、正確にいきますと、まったく新しく設立されたものではありません。すでに一九二九年にアジア主義者、国粹主義者としてよく知られる大川周明によって財団法人のかたちでつくられていた調査機関を満鉄が吸収して設立したのが、満鉄東亜経済調査局という組織でした。ここには後で杉田先生がお話になるはずの前嶋信次先生のような研究者も所属し、ユニークなイスラーム研究が行われていきます。そして最後に忘れてならないのが、「回教圏攷究所」、後に「回教圏研究所」と改名される調査機関です。この研究所は、イスラーム研究をアカデミックなレベルで担っていかうとする気概に溢れる若き学徒たちを結集してつくられたものでした。中心になって研究所の運営にあたったのは、当時、駒澤大学の教授を務めていたトルコ学者の大久保幸次という人です。

イスラーム学事始めの頃の井筒俊彦

以上のように日中戦争が始まると、日本ではイスラーム・ブームと称しても差し支えないような状況が澎湃として生まれきました。この渦の中に若き日の井筒俊彦、前嶋信次の両先生も否応なく巻き込まれていくことになります。前嶋先生の学問についてはこのあと杉田英明先生がお話になりますので、ここでは井筒先生のことにしぼりまして先生の青年時代におけるイスラーム学事始めの頃のことを中心にお話し、日本におけるイスラーム学の源流を探っていききたいと思います。

二、タタール人との出会い

井筒先生ついて語るとき、多くの人はしばしば天才という言葉を好んで使います。数十カ国語に通じるポリグロット、ただ言語的能力に優れるにとどまらず、深い哲学的思索と神秘主義への理解・共感に裏付けられた先生の壮大な思想研究に対する畏敬の念が、このような天才という言葉、形容となって表れているように思います。凡人がどんなに頑張っても越えられない屹立した山嶺、これが多くの人が井筒先生の学問に対して抱く印象、評価ではないでしょうか。しかし、ここでは井筒先生をたんに天才という言葉で片付けてしまうのではなく、「時

代の子」として捉え、その学問がどのように形成されていったのか、考えていきたいと思えます。先生がイスラーム研究の途に入られるのは、日中戦争がまさに始まろうとする頃です。慶應義塾大学文学部の英文科を卒業されたのが、日中戦争が始まった一九三七年、そして卒業と同時に文学部の助手になられますが、折からのイスラーム・ブームという時代の波に押されて先生は、もとの専門が言語学であるにもかかわらず、学生時代から抱いていた旧約聖書学、セム的一神教に対する関心を発展させてアラビア語、イスラーム研究の途にのめり込んでいきます。先生のイスラーム学事始めは、このように日中戦争期におけるイスラームに対する社会的な関心の高まりという文脈のなかで見えていかなければいけないように思います。

井筒先生の学問形成の問題を考えると、当時におけるイスラーム研究の先達の一人である大川周明との関係に注目し、その影響を見ていこうとする人がいます。また、回教圏攻究所を設立した大久保幸次とそのサークルに属する研究者との知的交流のなかで先生がイスラーム研究者としてどのような歩みを始めたのか、考えていこうとする人もいます。確かに先生の書かれた初期のイ

スラーム関係の著作や、戦中期のことを振り返って書いた思い出の記のなかには、たびたび大川周明、大久保幸次、お二人の名前が登場します。これから先生がいかに有形無形の影響をこれら二人の先覚者から受けていたのか、うかがうことができます。

しかし、私自身はこれらの人々との学問的な交流が井筒先生のイスラーム研究に強く影響を与えたことを否定するものではありませんが、これ以上に先生にとって決定的に重要だったのは、一九三一年の満洲事変、その後における満洲国の建国、蘆溝橋事件の勃発を経て日本が一九三七年以降、日中戦争に突入していく流れのなかで来日し、長く滞在することになる二人のタタール人ウラマーとの出会い、交流であったと考えます。井筒先生はこれら二人の碩学のところに足繁く通い、持ち前の語学力を駆使して誰よりも貪欲にイスラームの真髄を学びとろうとしました。このような僥倖に恵まれ、自らの血肉にしていたことが、先生のその後における学問の糧になつていったと思われれます。

井筒先生が教えることになる二人のタタール人ウラマーとの出会いについては、中央公論社から出ている『井筒俊彦著作集』の別巻『対談鼎談集』に入ってい

る作家・司馬遼太郎との対談をまとめた「二十世紀末の闇と光」のなかで語られています。そこで先生は、司馬遼太郎の書いた小説『韃靼疾風録』のタイトルの一部になっている「韃靼」という言葉がロマンに満ちた、夢を誘うものだとすることを述べつつ、実は韃靼とは、古くからロシア領内に住んでいるトルコ系のタタール人を漢字で表すときにあてられる言葉で、自分がかつて日中戦争の時期に日本にやって来ていた二人のタタール人と知り合い、その警咳に接してイスラーム諸学の手ほどきを受けたことがあると語っています。

そのうちの一人が、アブデュルレシト・イブラヒム（一八五七―一九四四）というウラマーでした。ボルガ川の中流域にカザンという町がありますが、イブラヒムはこのあたりに多く住むタタール人社会のなかで育ちました。彼は一九〇五年に起きた議会（ドゥーマ）開設を求める第一次ロシア革命に際して、帝政ロシア領内に住むタタール人を含むムスリムを糾合してスラブ系のロシア人に対抗してその宗教的、民族的権利を高めることに奔走したパン・イスラーム主義者として知られる人です。しかし、その精力的な活動にもかかわらず、思うような成果を得ることができず、イブラヒムは帝政ロシアの体

制に失望して一九一〇年に日本を頼って来日します。この頃の日本は、日露戦争の勝利に自信を得て、近隣のアジア諸国に軍事的、政治的、経済的に進出し、その影響力を拡大しようとしていました。しかし、その一方でヨーロッパ諸国への従属を強いられたアジアの諸民族に同胞として援助の手を差し伸べ、いっしょにヨーロッパの支配を跳ね返そうと考える軍人、政治家、民間のナショナリストもいました。イブラヒムは、こうしたアジア主義を標榜する人たちの支援を期待して日本にやって来たのです。

この最初の日本訪問の後、イブラヒムは、故国の帝政ロシアには帰らず、オスマン帝国に向かいます。そこで青年トルコ人革命を起こした軍人、トルコ民族主義者たちから助けを受けながら、帝政ロシア国外からパン・イスラーム主義者としての活動を続け、オスマン帝国が滅亡した後もトルコ共和国に留まりました。トルコは日本から遠く離れているため、イブラヒムと日本との関係は、一時的に途切れますが、一九三一年に満州事変が勃発し、翌年に満洲国が建国されると、イブラヒムは日本がイスラーム政策を進めていく上で欠かすことのできない重要な人物であると軍部によって見なされ、一九三三年にト

ルコから再び日本にやって来ます。この頃、満洲を植民地にした日本は、内モンゴルからムスリムが多く住む中国の寧夏省、甘肅省、青海省、新疆省（現在の新疆ウイグル自治区）にかけての地域、いわゆる西北四省に親日政権をつくり、これらを防共回廊にしてソ連に対する備えにしていこうとしていました。また、日中戦争において有利な戦いを進めていくためには、中国国内に多く住む回民と呼ばれるムスリムを味方につけていくことが是非とも必要と考えられていました。こうした日本側の思惑もあって中国およびその周縁地域に住むムスリムと強いネットワークで結ばれ、影響力をもつイブラヒムが再来日することになったのです。

イブラヒムの日本滞在は、日中戦争が勃発したあとも続き、結局、敗戦の一年前、一九四四年に東京で亡くなるまで続きました。井筒先生がイブラヒムと接触し、行き来するようになるのは日中戦争がはじまる直前の頃だと思われまます。ただ、先生とイブラヒムとの関係は、決して政治的なそれではなかったということだけは誤解のないように言っておかなければなりません。先生にとつてイブラヒムは、あくまでも伝統的なイスラームの学問をマドラサ（神学校）で修め、学識豊かなウラマーでし

た。このイスラーム世界でも令名の高い学者の門を叩いて教えを乞うというのが、井筒先生のそもそもの動機であつたように思われます。

このイブラヒム以上に先生に深い影響を与えたもう一人のウラマーが、同じ頃、日本には来ていました。ムーサー・ジャールツラー（一八七五—一九四九）という人がそれです。民族的にはイブラヒムと同じトルコ系のタール人で年齢的には一八歳ほど下の人で、来日したのは一九三八年です。この人との出会いについて、司馬遼太郎との対談のなかで非常に面白いエピソードが紹介されています。新宿から小田急線で一〇分ほど乗ったところに代々木上原という駅があります。そこを降りて進行方向を右に行きますと東京モスクがあります。この近くに来日したムーサー・ジャールツラーは住んでいました。若き井筒先生はイブラヒムの紹介状をもって彼に会いに行きますが、金銭的に必ずしも豊かではなかったのでしょうか、きちっとした部屋に住んでおらず、押し入れから出てきたのが初対面であつたと書いておられます。

これほどムーサー・ジャールツラーというウラマーは、日本で質素な生活をしていました。しかし、何度か接触するうちに井筒先生は、ムーサーの底知れない該博な知

識、深い思索力に圧倒され、傾倒していきます。彼の学識はイブラヒムも認めるところですが、当時のイスラーム世界のなかでも群を抜くものがありました。このムーサーというウラマーとの運命的な出会いによって先生は、イスラーム学の途に踏み込んでいくことになります。

三、イスラーム改革思想家としての歩み

日本のアジア主義にパン・イスラーム主義を接ぎ穂するため来日したイブラヒムについては近年多くの研究が出され、それなりによく知られるようになってきています。しかし、同じ時期に日本に滞在したムーサー・ジャールツラーについては、日本ではほとんど知られておりません。ただ、彼を近代イスラームの改革思想、パン・イスラーム主義の思想と運動という文脈のなかでみますと、彼はイブラヒム以上に重要な思想家であることが分かります。

パン・イスラーム主義の思想を確立し、行動に移した人として有名なのは、アフガーニーという人です。彼の影響を受けて近代のイスラーム世界は大きく揺れ動きました。たとえば、エジプトではムハンマド・アブドゥフとその後継者であるラシード・リダーによってイスラ

ム改革運動が起こされました。また、イランではイギリスが獲得したタバコ利権を不当として、アフガーニーの思想に影響されたウラマーたちがボイコット運動を起こしたことはよく知られる通りです。

しかしながら、帝政ロシア領内に住むムスリムたち、とくにトルコ系のタタール人たちがアフガーニーのパン・イスラーム主義に影響されて改革運動、民族運動に身を投じていったことについては、これまであまり関心が向けられませんでした。これらの人たちが近代のイスラーム改革思想のなかで占める位置は、決してエジプト、イランのそれに劣るものではありません。むしろそれ以上に重要な思想的役割を果たしていたということを指摘しておかなければなりません。彼らのネットワークは、エジプト、イランのウラマーを凌ぐものがあり、それを使ってパン・イスラーム主義にもとづく改革運動を行っていました。そうしたタタール人のイスラーム改革思想家を代表するのが、ムーサー・ジャールツラーという人です。

ムーサー・ジャールツラーについては、古くはトルコ系バシキール人出身の歴史家・思想家として著名なゼキ・ヴェリディ・トガンによって簡単な伝記が書かれて

おりますが、近年になってトルコ共和国のメフメト・ギョルメズ、アフメト・カンルデレといった研究者によってムーサーの伝記および彼を含むタタール人のイスラーム改革思想家についての優れた研究書が刊行され、これまであまり知られていないムーサーのイスラーム改革思想家としての面に光があてられています。オスマン帝国末期にシエイフル・イスラームの職にあつたムスタファ・サブリとムーサー・ジャールツラーとの間の論争にかんするトルコ語史料も出版されています。さらに二〇〇二年にはトルコ共和国でムーサー・ジャールツラー没後五〇年を記念してシンポジウムが開かれ、その時の報告集も出版されています。このようにムーサー・ジャールツラーの評価は、最近とみに高まっていると言えますが、それだけの価値を持つ忘れられた思想家と井筒先生は日本において出会い、親しくその教えを受ける幸運に恵まれたことになりました。

ムーサー・ジャールツラーとはいかなる人なのか、次にその略歴について簡単に紹介しておきたいと思えます。彼は、一八七五年に黒海に注ぐ大河としてよく知られるドン川下流域にある町ロストフにタタール人を両親として生まれました。ここ出身の有名人としては、ロシア人

でありますけれども、『収容所群島』を書いた文学者のソルジェニーツインがいます。それからあともう一人、帝政ロシア末期の文豪アントン・チェーホフがいます。彼の故郷は、ロストフから西に六七キロメートルほど行ったところにあるアゾフ海に面したタガンログという港町です。

ムーサーは一二歳まで地元にあるロシア系の世俗学校で初等教育を受けました。しかし、そこを終了した後、ベムスリムならばきちつとしたイスラーム教育を受けるべきだという母親のたつての希望でヴォルガ川中流域にあるカザンに行き、そこにあるギョル・ボユ神学校に入學します。カザンにはトルクストイヤレーニンが学んだことでも知られる当時、帝政ロシア領内でも指折りの大学の一つに数えられるカザン大学がありました。ムーサーが勉強することになるのは、それとは違う純然たるイスラームの学問を教えるマドラサでした。カザンという町は、現在、ロシア連邦を構成するタタールスタン共和国の首都になっていますが、帝政ロシア時代においてもタタール人を含むムスリムにとって政治的中心地であるとともに、多くのムスリムの青年がイスラームの学問を学ぶために集まって来る文化的センターでした。ここ

でムーサーはウラマーになるための基礎的な学問を修めていきます。

カザンの神学校で勉強した後、ムーサーは中央アジアのオアシス都市ブハラに留学します。ここには他のイスラーム世界の諸地域ではすでに絶えてしまっていたイブン・スィーナの哲学、神学の伝統が脈々と残っていました。これにムーサーは惹かれてヴォルガ川中流域のカザンから中央アジアのブハラを目ざし、遊学していったのです。そして、ここでの勉強を終えた後、さらにエジプトのカイロに向かい、一八九八年から約五年間留まり、研鑽に努めます。タタール人がアラブ世界に留学に行くということは、この頃、結構さかんでした。すでに述べたイブラヒムも、アラビア半島のメディナに長期にわたって滞在し、勉強しますが、この時に培った人脈、ネットワークが後に彼のパン・イスラーム主義者としての活動に役立っていきます。これに倣うようにしてムーサーもエジプトに出かけ、その学問を深めていったのです。

彼がカイロでの留学生活を終えてカザンに戻るのはい九〇三年のことです。帰国してしばらくして一九〇五年に第一次ロシア革命が起きますが、ムーサーはこれにイ

ブラヒムとともにムスリムの権利拡大、議会開設を求めて飛び込んでいきます。しかし、そうした政治活動に積極的に関わるなか、一九〇七年にはペテルブルグ大学法学部に一時的に籍を置いて近代的なヨーロッパの学問も修めます。ムーサーという人は、帝政ロシアのムスリム社会に生まれ、一貫してイスラームの伝統的な教育を受け、ウラマーとしての途を歩んできた人です。しかし、ヨーロッパの世俗的な学問をまったく拒否する人ではありませんでした。むしろその優れたところは取り入れながらイスラームを改革していこうとする柔軟なムスリムの知識人としての顔をもつのがムーサーという人でした。

ムーサー・ジャールツラーは、近代のイスラーム思想史のなかでも傑出した改革思想家でした。彼の真骨頂は、伝統的なイスラームの神学、法学の方法論にこだわらず、斬新な解釈をしていくところに最大の特徴があります。かつて中世のイスラーム世界にはラーズィー、あるいはバイダーウィーといった非常に優れた神学者がおりました。そうした人たちが行ってきた伝統的な解釈に縛られることなく、自由な立場からコーランを解釈していくことを主張したのが、ムーサー・ジャールツラーという思想家でした。こうした点から一九〇五年に書かれた『コ

ーランと写本の歴史』という本は、近代のコーラン研究史を考えていく際に非常に重要な著作だと思われれます。イスラーム世界においてはコーランに厳密な解釈を加えるという伝統のなかから、タフスィール学という学問分野が確固たるかたちで存在することはよく知られる通りですが、これに縛られず柔軟に、自由にコーランを解釈していこうとするのが、ムーサーがめざすやり方でした。こうした彼の方法論は、井筒先生の後のコーラン研究に決定的な影響を与えたのではないかと思われれます。先生は、『意味の構造』をはじめとして沢山の素晴らしいコーラン分析をされています。これらの著作に共通しているのは、従来のタフスィール学に縛られずに、むしろヨーロッパ・アメリカで盛んであった意味論の方法論を大胆に取り入れながら、訓話の学に陥らない自由な解釈をすることに努めたところにあります。先生のこうした姿勢の原点は、ムーサー・ジャールツラーとの出会い、その自由闊達なコーラン解釈学にあると私は考えております。

あともう一つどうしても指摘しておかなければいけないのは、イスラーム法学の分野におけるムーサーの自由な解釈の仕方です。彼がやるうとしたことは、スンナ派

イスラーム世界において長い間禁止されてきたイジュティハード（自由な法解釈）の門の閉鎖を解くことでした。一九世紀以降、世界の一体化がますます進むなかで、イスラーム世界のウラマーたちが中世の先人たちが行ってきた解釈をいつまでも後生大事に墨守しているのはおかしい。ヨーロッパの法体系との摩擦、衝突が進み、イスラーム法がこれに対してどのように対処するかが問われている時代だからこそ、斬新な解釈を行うべきだというのがムーサーの法学観でした。こうした思いから彼は一九一〇年に『カヴァーイデイ・フィクヒーヤ（イスラーム法学の諸原理）』という著作を出版しますが、これにムーサーの自由で柔軟な法学者としての面がよく現れているように思います。

一九一七年に第二次ロシア革命が起きると、ムーサーは当時、国外のオスマン帝国において青年トルコ人政府に協力して活動していた盟友のイブラヒムとは違って、帝政ロシアのなかで革命に参加していきます。しかし、ポリシエヴィキが権力を掌握し、ソ連邦が形成されると、次第に彼を取り巻く状況は厳しくなり、ついに一九三〇年に今の中国・新疆ウイグル自治区のカシユガルに逃れ、そこからパミール高原を越えてアフガニスタンに亡命す

ることを余儀なくされます。この後ムーサーは、約八年間にわたってインド、エジプト、イラン、イラク、トルコ、フィンランド等を巡る放浪の生活を続けていくこととなります。

四、ムーサー・ジャールツラーの来日

ムーサー・ジャールツラーが日本にやって来るのは、日中戦争がはじまった翌年の一九三八年のことです。たびたび名前を出しております盟友のイブラヒムが来日したのが満洲事変後の一九三三年ですから、ムーサーは彼に遅れること約五年して日本の土を踏んだこととなります。ただ、ムーサーの動静については、イブラヒムと連絡があり、来日する可能性のある要注意人物として一九三四年頃からすでに日本では関心がもたれていました。このことは、当時警視総監を務めていた藤沼庄平が関係当局に宛てた外秘第一〇二七号（昭和九年四月二一日）という次の通達からうかがうことができます。

ムサ・ヂヤルラ（當六十年位）。国籍不詳ナルモ、一九二九年迄蘇聯邦内ニ居住。舊露国サラトフ縣ニ生レ、回教神學者トシテ有名ナル人物ニテ、嘗テ雜

イスラーム学事始めの頃の井筒俊彦

誌「イス^マスタン^プール」ヲ發刊セルコトアリ。一九三一年ニ於ケル回教大會ニ出席、爾來、各地ヲ轉々シ、最近、土耳古「ハレスタ^イン」ヲ發シ、印度方面ニ活動中ナル趣ニテ云々

この史料によると、ムーサーはソ連を出国した後、一九三一年にイギリスの委任統治領であったパレステイナのエルサレムで開かれたパン・イスラミスト国際会議に出席、それが終わると各地を転々とし、通達書が出された一九三四年頃にはトルコからインド方面に移って活動していたと考えられます。具体的にインドのどこなのかはつきりしませんが、来日後の一九三九年一月一八日に東京の丸ノ内日本倶楽部で開催された「世界回教徒第一次大会」にアフガニスタン代表という肩書きで出席していることを考えますと、ムーサーが活動の拠点としていたのは、アフガニスタンであった可能性が大きいように思われます。

彼にとってアフガニスタンというところは、きわめて重要なところでした。ここは、ソ連の社会主義体制を嫌って暴動を起こして逃れてきたトルコ系のカザフ人、キルギス人などの亡命者が集まって来るところでした。

また中国の新疆地方で反乱を起こし、鎮圧されたウイグル人たちもここを中継地としてトルコなどの国に亡命していました。こうしたアフガニスタンの占める地政学的位置に着目して多くのパン・イスラーム主義者がここを情報収集、諜報・工作活動の基地にしていきましたが、ムーサーもまたその一人であったように思われます。

日本にとつてもこの時期におけるアフガニスタンは、戦略的に重要なところでした。日本が防共回廊にしようとしていた中国の西北四省に対する前線基地は、満洲、内モンゴルでした。これらの地域から関東軍、駐蒙軍に属する軍人がさかんに情報収集、工作活動を行ったことは、すでに述べた通りです。しかし、パミール高原を西に越えた地域、すなわち西トルキスタンからイラン、トルコにかけての諸地域、あるいはマラッカ海峡を越えたインド洋周辺地域、アラビア半島、イラク、シリア、エジプトといった地域は、地理的に遠いということもあって満洲、内モンゴルからの情報・工作活動ができないところでした。こうした状況のなか、これらの地域に働きかける日本のイスラーム政策の拠点として重視されてくるのが、アフガニスタンでした。

ただ、ここでイスラーム政策を熱心に取り組んだのは、

陸軍の軍人ではなく、外交官であったことに注意を払わなければなりません。これには一九三六年に日本とドイツの間で結ばれる日独防共協定が関係しています。この協定では日本がイスラーム世界のなかで情報収集、工作活動ができる地域は、陸ではパミール高原まで、海ではマラッカ海峡まででそれより西の地域はドイツの守備範囲であるという暗黙の了解がありました。これが枷となつて軍人はそれらの地域において表だつた活動をするのができず、これに代わつてアフガニスタンに駐在する外交官が情報収集を中心とした活動を行つていくようになっていました。

これについては面白いエピソードが残されています。満洲、朝鮮半島に滞在した経験をもつ陸軍参謀本部の情報将校で、一九三二年の満洲事変後、イスタンブルにあった駐トルコ・日本大使館に武官として赴任した神田正種という人がおります。彼は、トルコにおいてアブデュルレシト・イブラヒムと連絡をとり、一九三三年に彼を日本のイスラーム政策に協力させるべく日本に送つた軍人として知られています。ある時、任地のイスタンブルからエジプトに出張し、アレクサンドリアにあった駐エジプト・日本総領事館に立ち寄ります。そこで総

領事をしていた北田正元という外交官と会った際に、まだ日独防共協定は結ばれておりませんが、ドイツ人への遠慮があったのでしうか、軍人はエジプトはもちろん、インド洋周辺の海域で情報収集、諜報工作をすることができない。ついては外交官が代わってこれを行うべきであるという趣旨のことを言います。これに力を得た北田正元は、後にアフガニスタンへの転任を強く希望し、そこで公使としてイスラーム政策を積極的にすすめていくようになります。東の中国方面において外交官はイスラーム政策の立案と実施において軍人に遅れを取り、後塵を拝するばかりでした。こうした状況を少しでも挽回し、独自のイスラーム外交を行っていきたいというのが当時の偽らざる外交官の気持ちであったように思われます。

こうしたアフガニスタンにおける北田正元等の活動もあつて一九三八年にムーサー・ジャールツラーの来日が実現します。彼が日本に来た本来の目的は、イブラヒムと同じようにに日本の支援を得てソ連の社会主義体制、イギリスの植民地支配等で苦しむムスリムの状況を改善し、それとともに日本のイスラーム政策に協力してネットワークを強化し、ムスリムを日本の方に引きつけると

いうところにありました。このかぎりにおいてムーサーの来日には、政治の影が色濃く射していたといわなければなりません。ただ、ムーサーは、イブラヒムほど政治性が強い人ではありませんでした。イブラヒムも認めるように、彼は当代きつてのイスラーム世界を代表する改革思想家であり、イスラームの学問に通暁する偉大なる碩学でした。

こうした学者としてのムーサーに傾倒し、親炙したのが、若き日の井筒先生でした。日中戦争期のブームのなかで多くの人々がイスラームに関心をもち、研究を始めていきますが、先生ほどムーサーのところに足繁く通い、その学問の真髄を学びとつた人は恐らくいないのではないのでしょうか。この時期に先生は起きてから寝るまで一日中、アラビア語の生活に明け暮れたということを後になつていろいろなところで回想しています。しかし、それと並行してロシア語にもこの時期に打ち込んでいます。想像するに、これはムーサーといっしょに勉強するのにタタール語、アラビア語とともに、ロシア語もコミュニケーションをしていく上で必要、欠くべからざる手段であったことを物語っているのかもしれない。

この後、杉田先生がお話しになる予定の前嶋先生は、

残念ながらムーサー・ジャーロッパラーとは会う機会をもつことができなかったようです。ただ、先生の書かれた『アラビア学への途』を読みますと、一九四一年頃、当時、上野不忍池の近くに住んでいたイブラヒムのところに井筒先生と連れだつて訪ねたことが誌されています。今のようにイスラーム世界との交流がさかんでなかった時代に、イブラヒムのようなイスラーム世界の大立て者と会うことができたことは、前嶋先生にとつて貴重な体験であつたと思われませんが、ムーサーとは彼が一九三九年には帰国してしまつたため、会うことが叶いませんでした。

約一年半に及ぶ日本での滞在の後、ムーサーはインドに向かいます。しかし、そこで彼はイギリス官憲によつて危険人物と見なされ、現在はパキスタン領になつているペシャワールで逮捕され、第二次世界大戦が終わるまでそこで監禁生活を強いられます。晴れて自由の身になるのは戦後になつてからのことです。釈放後はインドからトルコに行き、イスタンブルに一九四七年から四九年まで滞在した後、エジプトに移り、一九四九年にカイロの養老院でその生涯を終えました。

五、日中戦争期におけるコーランの翻訳

少し時間が迫つてきましたので、後は簡単に井筒先生のコーラン翻訳への途ということで掻い摘んで話しをさせていただきたいと思ひます。先生の学問を考えていく場合、度々申しておりますように、ムーサー・ジャーロッパラーとの出会いは決定的に重要だと思われれます。ムーサー自身の学問の出発点となつたのは、一九〇五年に著された『コーランと写本の歴史』です。これを踏まえての蘊蓄を傾けたムーサーの教えがどういうものであつたのか、今となつては分かりませんが、お二人のコーラン研究がどのように繋がつてゐるのか、一度、きちつと文献学の方から調べてみる必要があるように思ひます。

ひるがえつてコーランの翻訳史のなかで日中戦争期を位置づけてみますと、この時期は世界的に見てアラビア語からコーランがさまざまな言語にさかんに翻訳された時期であることが出来ます。たとえば、最近、筑摩書房から翻訳が出た『コーラン入門』の著者で、イギリスのエディンバラ大学で教授を努めていたリチャード・ベルが英訳を出版したのが、まさに日中戦争期の一

九三七―三九年のことです。さらにインドでは、この時期にウルドゥー語と英語の訳がそれぞれ出版されています。

そしてさらに付け加えなければいけないのは、トルコ共和国においてこの時期に現代トルコ語訳が相次いで、集中的に出されていることです。一九三二年のイズミルリ・イスマイル・ハック訳のローマ字アルファベット版（一九二七年版の再版）、一九三四年のオメル・ルザの訳本、一九三五―三八年のエルマルル・メフメト・ハムデイによる訳がそれです。こうした状況に刺激されて日本でも原典からの翻訳が行われるようになってきます。当時、日本のイスラーム研究を牽引していた大久保幸次、小林元阿氏によるコーランの翻訳がそれです。これは、一九三八年から回教圏攷究所の機関誌であった『回教圏』に「邦訳コーラン」という題で連載が開始されますが、敗戦によって雑誌は廃刊となり、未完に終わります。しかし、戦後の一九五〇年になってそれは『コーラン研究』（刀江書店）としてまとめられます。このコーラン翻訳は、一九一三年にオスマン帝国で出版されたアラビア語原典を基にイズミルリ・イスマイル・ハック、オメル・ルザの両トルコ語訳、インドでムハンマド・アリー、

ユースフ・アリーによって出された英語訳を参照して行われていますが、部分訳にとどまり、本格的なアラビア語から日本語へのコーラン翻訳は、戦後の一九五七―五八年における井筒先生のお仕事を待たなければなりませんでした。

最後に井筒先生の学問を日本におけるイスラーム研究史のなかでどのように位置づけていくべきかということについて触れて終わりにしたいと思います。日中戦争期は、井筒先生にとつてイスラーム学事始めの時期でした。当時の日本におけるイスラーム研究を引っ張っていたのは、大久保幸次を中心とする回教圏攷究所、後の回教圏研究所に属する研究者でした。こうした人たちと交流を続けながら、またムーサー・ジャールツラーの圧倒的な影響を受けながら、ひたすら自らの学問の基礎をつくられていたのが日中戦争期における若き日の井筒先生であつたと思われまます。

井筒先生のイスラーム学が開花するのは、日本が戦争に負け、研究の方はむしろ停滞する戦後になってからのことです。戦争が終わると、日中戦争期のイスラーム・ブームのなかで国策に協力して華々しく開設された調査

研究機関のほとんどは、閉鎖を余儀なくされます。正確には雲散霧消してしまっただけで、いいかもしれせん。そうしたなかで先生が所属する慶応の語学研究所、今の言語文化研究所の前身となる組織は、幸いなことに解体をまぬがれました。細々とはありますが、井筒先生によってイスラーム研究の孤塁を守り通すことができました。これは、慶應義塾にとつてまことに幸運なことでした。さらに一九五〇年からは満鉄東亜経済調査局でイスラーム研究をされていた前嶋信次先生が慶應の語学研究所研究員として迎えられ、次いで文学部の専任教員になったことよつて慶應義塾のイスラーム研究は日本の学界のなかで例外的にきわめて充実した体制をつくりあげることができました。

戦前における日本のイスラーム研究は、大久保幸次と彼が所長を務めた回教圏研究所に象徴的に示されるように、トルコ研究が主流でした。戦前における日本の海外への軍事的進出は、大きく北進論と南進論に分けられませんが、草創期の日本におけるイスラーム研究の多くは北進論と結びついで中央アジア、ユーラシアに広く分布するトルコ系諸民族のそれに大きな関心が払われました。こうしたなかにあつてアラブ・イスラーム研究は、どち

らかという脇に追いやられていました。こうした流れのなかで戦後になつて日本のイスラーム研究をアラブのそれに大きく舵を切る上で重要な役割を果たされたのが、井筒、前嶋の両先生でした。お二人の先生の足跡をたどりながら、これからのイスラーム研究のあり方を後に続く私たちはよく見きわめていかなければならないと思います。少し時間を超過しましたが、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。